

## 「待つ楽しみ」が消えつつある文化



「そういうわけで今週は都合がつかなくなった。悪いねえ。来週は大丈夫だから」。すまなそうな謝りの携帯電話は小学校時代の同級生からだった。この日の夜の再会を私も楽しみにしていたのだが、向こうの都合で急きょ延期となった。還暦のとき、郷里で行われた同級会以来だからもう7年になる。「そりゃあやむを得ないね。残念だけど、じゃあ来週」と電話を切った。

ずいぶん便利になったものである。出先まで電話がつながる時代だ。状況の変化を瞬時に相手まで伝えることができる。でも、あまりに早いものごとの進展は便利な半面、何か心の奥まで届かないものもあるような気がする。

そういえば、昔は何をするのにも、「待つ楽しみ」があった。手紙を出せば、返事が来るのを何日も待ったり、欲しいものを頼めば、それが手に入るまで、まだか、まだかと楽しみにしていた。届いた手紙は味のある毛筆だったり、あまり上手でないボールペン字でも本人の直筆で親しみが湧く。何回も読み返したり、手紙の向こうにある情景を想像したりもした。



今は、遠く離れていても、電話かメールですぐに連絡が取れる。その代わり、待っているときの楽しみが半減した。どこへ行くのも、何をするのも、そこに至る前のワクワク待っている時間が楽しいものだ。恋人とコーヒー店での待ち合わせ——昔は心をときめかせながら、彼女を待つあいだコーヒーを楽しんだ。今は「あと5分で着くわヨ」と降りた駅からメールが入る。待ち人が突然に現れるという意外性がなくなった。胸を躍らせながら待つ時間には、心豊かな得がたいものもあるのではないか。



そもそも現代は忙し過ぎる。話は飛躍するが、人類はすでに200万年前に生活していた。「有史」などという2000年やそこらは、その1パーセントにも満たない。「文明の危機」などと騒いでいる現代の10年とか100年ほどの時間は、10両連結の電車で言えば、1席分にも満たないだろう。

情報文明の進歩は速さと便利さをもたらしてはくれたが、必ずしも100パーセント人々に幸せをもたらしてくれたとは言い切れない。平安時代と現代の人々とどちらが幸せか、なんていう問いの結論も簡単には出ないだろう。ノスタルジアに浸るわけではないが、「昔のほうが楽でよかった」という声も聞く。自分のような高齢者は、情報文明から追いつけられたいな気がする。“文明の急ぎ死に”や“地球の終末”を招かないように！なんて思いがしないでもない。

ついでにもう一言。特に日本人は急ぎ過ぎです。ちなみに、ホテルの受付で待たされるお客さんがイライラし始めるまでの時間は：アメリカ人10分、中南米人40分、日本人5分→「走る日本人、待てない日本人」なのです。

